

韓国籍を持つ東京基督教大学生の学校生活に関する質的研究

徐 有珍

キリストと世界 29号抜刷 2019.3.1

韓国籍を持つ東京基督教大学生の学校生活に関する質的研究¹

徐 有珍

(東京基督教大学助教)

1 研究の背景と目的

東京基督教大学 (Tokyo Christian University 以降 TCU と記述) は、1990 年に文科省の認可を受け創立した、比較的新しい四年制大学である。神学部のみを有する単科大学であり、プロテスタント・キリスト教の福音派に属し、教育の対象を信者 (クリスチャン) に限定している。その建学の精神に記載されている 4 つのキーワード、「福音主義」「超教派」「実践的神学教育」「世界宣教」は、大学の神学的立場を表すのと同時に、それぞれが人間形成のゴールにも深く関わっている。例えば「実践的神学教育」では、学生の「姿勢」や「行動力」といった、学生の内面的な成長 (人格形成) のゴールを、「福音を肌で感じさせる人材」としている。また 4 つ目の「世界宣教」は、学生を異文化の中での宣教師・奉仕者の働きにふさわしく整えることを、人材育成のゴールとしてうたっている。

TCU のホームページ上で公表されている「運営に関する方針」の中には「留学生の受け入れ」という項目があり、そこには以下のような文言が記されている。「正規学生として国内外から留学生を受け入れ、在学生に占める留学生の割合を 25% 以上となることを目指す。また短期留学生を、科目等履修生として協定校をはじめとする国外の大学や高等教育機関等から積極的に受け入れる」²。同様に、TCU の「理念とミッション」の中には「異文化・他者理解」という項目があり、そこには以下のような文言が記されている。「文化、国籍、性、年齢などの違いがもたらす『隔ての壁』を打ち壊すキリストの福音 (神学) を味わい、和解と一致を体験するために、外国語習得に力を注ぎ、多様な国際交流プログラムを実施して、異文化・他者理解

1 本研究には、2018 年度の東京基督教大学・学長裁量経費 (研究補助金) が用いられている。また本研究には、東京基督教大学大学院の学生、金道均、姜吳憬、李成俊が協力者として参加した。

2 東京基督教大学ウェブサイト (<http://www.tci.ac.jp/info/policies>)

を深める」³。これらの正式な文章からもわかるように、TCUでは、キリスト教の精神に基づく、学生の「異文化理解」の促進が強調され、それが大学による人格形成や人材育成の中心的方法、さらには目標のひとつとして位置付けられている。そのための教育環境として、「国際的なキャンパスライフ」が提供されており、実際、アフリカ、アジア、北米、南米など世界中から学生が集まっている。大学（大学院も含む）在學生の中で全体の約4分の3を占める日本人学生は、この「異文化理解」を促進するために意図的に形成された環境から、多大なる教育的恩恵を受けているとすることができるだろう。一方で、全体の約4分の1を占める留学生はどうかであろうか。当然彼らは、日本人学生のための教育環境の一部としてのみ存在しているわけではない。彼らもまた日本人学生同様に、異文化理解をはじめとする、様々な教育の享受者でもある。

本研究は、TCUの全学生の、約4分の1に相当する外国人学生の中から、韓国からの留学生（以降「韓国学生」と呼ぶ）に焦点を当てたケース・スタディーを実施し、このグループに属する学生が、どのような理由で来日し、大学の中でどのようなことを学び、どのように生活し、どのような喜びや困難を経験し、それらがどう彼らに必要な学びや、人材育成、さらには信者としての人格形成（以降、信仰形成と呼ぶ）に結びついているのかといった事柄を調査するものである。具体的には以下の3つの項目を、研究の大きな目的として挙げ、それらに向かって本研究は進められた。

- ① TCUに在籍する韓国学生への学びや生活、そして信仰形成の環境等を検証すること。
- ② 検証の結果をTCUに在籍する韓国学生をはじめとする、留学生の学びや生活、そして信仰形成に活かすこと。
- ③ 研究方法とその成果を、広くクリスチャン・ミニストリーに役立てること。

本研究の中心的な目的は上記の①であり、本稿の大きな部分がそのために割かれている。また研究分析の結果や検証のプロセス（研究のために用いられる方法）そのものを、さらに広いコンテキスト（上記の②③）に活かすことを念頭に置いて本研究は進められた。研究者が特に注目した点は、TCUの「理念とミッション」に

3 東京基督教大学ウェブサイト (<http://www.tci.ac.jp/info/statement>)

記されている文言に関連する検証で、たとえば「文化、国籍、性、年齢などの違いがもたらす『隔ての壁』を打ち壊すキリストの福音（神学）を味わい、和解と一致を体験する」という文言が、韓国人学生にとって現実のものとなっているかどうかといった事柄である。さらには、TCUに在籍する韓国人学生のみならず、全ての留学生、および将来TCUに受け入れられる留学生のための教育環境の改善も念頭に置かれている。

2 研究の方法と特徴

研究対象者

留学生を対象に研究することの注意点に関しては、中国人留学生を対象にした研究を実施した金沢大学大学院教育学研究科の松下が以下のような注意点を述べている。

留学生を調査・研究の対象とする際には、明らかにしたい目的と関連する多くの項目を考慮する必要がある。宗教的、文化的背景をはじめ、経済面（国費・私費・政府派遣）、留学目的（学位取得・日本語や日本文化体験）、滞在期間の長短などが、日本で学ぶ外国人留学生の意識と行動に影響する要因であることは周知の事実である。これまで、等質性が高い日本人学生を対象としてきた青年心理研究においては特に注意が必要であり、被験者全体の構成について詳しい記述を望みたい。⁴

本研究では上記の記述を念頭に、以下のように研究対象者の構成に関する検討を行った。まず考察されたのは、TCUの韓国人学生とは、どのような学生を指しているのだろうかということである。韓国籍の学生、韓国からの留学生といった、大雑把な説明も可能だが、実際そこには、多様な背景の学生が含まれている。例えば、国籍は韓国であっても、TCUへの入学のため来日した学生や、親の仕事で子供の頃来日した学生もいる。また国籍は日本だが、人種的には韓国人という学生や、片親が韓国人の場合もある。片親が韓国人の場合、苗字は韓国人だが、国籍は日本。

4 松下美知子「留学生を対象とした研究をするということ」（『青年心理学研究』25、2014年、142-147頁）

また逆に、苗字は日本人だが、国籍は韓国といった場合も想定できる。当然、それぞれの環境から受けた文化的影響も様々であろう。

このような多様性（サンプリングの幅）が想定される中、本研究で調査の対象となったのは、本研究の目的に賛同した、TCUの学部、および大学院に在籍する、韓国籍で韓国生まれ、さらに両親が韓国籍の男女学生11名（男性8人、女性3人、年齢は20代前半から50代）であった。11名に対する基本的質問から、彼らのTCUの在学年数の幅は約1年から約4年であることがわかった。具体的には、約1年：5人、約2年：1人、約3年：3人、約4年：2人である。日本での全滞在期間の幅も広く、最短で3年、最長で22年であった。⁵

上記のような多様性を持つインタビュー対象者が選ばれたが、性別、年齢、在学年数、および滞在年数と、回答内容の質的なクロスリファレンス分析を実施した結果、回答の傾向と性別、年齢、在学年数、日本滞在年数それぞれの間、顕著なパターンは見出されなかった。言い方を変えれば、インタビュー調査を通して、実に多種多様な意見が収集されたが、性別、年齢、在学年数、滞在年数といった個別の背景と、密接に結びついた明らかな規則性は浮かび上がって来なかったということである。研究の記述を進める前に、まずその点に言及しておきたい。

インタビュー調査

本研究でのインタビューを用いたデータ収集は、2018年5月と6月に実施された。実施場所はTCUの構内で、個人インタビューとグループインタビューが併用された⁶。またインタビューに用いた質問は、本稿筆者に加え、TCU大学院に在籍する韓国人学生、金道均、姜昊憬、李成俊、および日本人教員の岡村直樹による5人の協議のうえ、前章の「研究の目的」を念頭に決定された。質問は以下の4つのカテゴリーに分けられ、準備された。①「基本的な質問」、②「学び、信仰の訓練、将来に関する質問」、③「寮生活に関する質問」、④「文化・アイデンティティーに関する質問」。各カテゴリーには、4問ずつの質問が配置され、計16問が用意された。

5 以下に研究参加者11名の日本滞在年数を列挙する。(約4年:3人、約5年:1人、約6年:3人、約8年:1人、約14年:1人、約17年:1人、約22年:1人)

6 基本的には、グループインタビューが用いられたが、インタビュー対象者のスケジュールを考慮し、個人インタビューとなった場合もあった。割合は、グループインタビューが2グループ6人、個人インタビューが5人であった。用いられた質問には変わりがない。

①「基本的な質問」では、在学年数、日本での滞在年数、入学の動機といった、個々の学生の背景に関する質問がなされた。

②「学び、信仰の訓練、将来に関する質問」では、TCUでの学びや、キリスト教の信者としての信仰形成に関する質問がなされた。それらは「献身者」⁷として入学した学生に必要な訓練や、将来のビジョン等と結びついた質問である⁸。本研究の分析の中では「信仰」とは何か、また「信仰の成長」とは何を指すのかといった言葉の定義に深く言及することは、紙面の制限もあり、それを行っていない。基本的に本研究では、インタビュー対象者である韓国人学生のそれぞれが、独自の観点から語った言葉をそのまま用いている。

③「寮生活に関する質問」では、TCUにおいて重要視され、異文化理解や他者理解、そしてその実践のための教育環境と位置付けられている「寮教育」に関して、その人的、および物的環境面に注目した質問が準備された⁹。調査対象者11名中10名は、現在、TCUでの独身寮、または家族寮生活を送っているか、または以前にそれを経験している者である。したがって、寮経験のない1名の学生は、この質問事項からは除外されている。

④「文化・アイデンティティーに関する質問」では、留学生としての取り扱い（組織としての大学からの取り扱いや、個々の学生による取り扱い）に関する質問を中心に据えた。以下に、インタビューのために用意された質問の①から④を列挙する。

インタビューの質問

-
- 7 今回のインタビュー対象者はいずれもキリスト教会の教職を志望する「教会教職課程」に在籍している。
 - 8 東京基督教大学のウェブサイトの「学生生活FAQ」のページには、以下のような「献身者」の説明がされている。「TCUが言う『献身』とは、牧師や宣教師になることだけでなく、広くこの世界でキリストに仕える者としての献身を意味します。
 - 9 東京基督教大学のウェブサイトの「寮教育」のページには、以下のような説明がされている。「全寮制のTCUでは、寮はただの生活の場ではありません。聖書の御言葉と教室での学びを実践するところ、社会人として、またクリスチャンとしての生活の基本を身につけるところです。朝に祈り、ともに食事をし、ときにはぶつかり、和解し、一生の友と出会い、新たな自分に出会うところです。また、多くの留学生とも一緒に生活をし、国籍、文化、言語の違いを越えて神の家族の交わりを体験することを目指します。

基本的な質問

- 1) あなたは、どのような理由で日本に来られましたか。
- 2) あなたが TCU を受験することを決めた理由は何ですか。TCU のどのような点に魅力を感じましたか。
- 3) あなたは TCU に入学して何年・何ヶ月になりますか。
- 4) あなたの日本滞在は、合計で何年になりますか。

学び、信仰の訓練、将来に関する質問

- 1) あなたは TCU で、自らの信仰の成長を実感していますか。信仰の成長をもたらしているものは何ですか。
- 2) あなたは TCU で、あなたの将来に必要な学びや、信仰の訓練を受けていると感じていますか。TCU の優れている点や、強みは何だと思えますか。また TCU が改善すべき点は何ですか。具体的にお答えください。
- 3) あなたは、あなたの教会生活や教会奉仕に満足していますか。
- 4) あなたの TCU での学び全体に関して、あなた自身に改善すべき点がありますか。具体的にお答えください。

寮生活に関する質問

- 1) あなたは TCU で寮生活をしていますか。何寮ですか。同居しておられるご家族は何人ですか。
- 2) あなたには TCU での寮生活を始めるうえで、困ったことはありませんか。具体的に教えてください。
- 3) あなたには TCU での寮生活に関して、継続的に、困ったり、悩んだりしている(いた)ことはありますか。具体的に教えてください。
- 4) あなたの TCU での寮生活に関して、TCU が改善すべき点がありますか。具体的に教えてください。

文化・アイデンティティーに関する質問

- 1) あなたは TCU の韓国人留学生の取り扱い(生活や学習、その他)についてどう思いますか。改善すべきであると思う点があれば教えてください。
- 2) あなたは TCU で、韓国人として差別的な扱いを経験したことがありますか。それはどのような経験でしたか。またその理由は何だと思えますか。
- 3) あなたは TCU で、自分が韓国人であることに誇りを持っていますか。具体的な体験や思いなどがあれば教えてください。
- 4) あなたは TCU への入学を考えている韓国人に、入学を勧めますか。その人に

具体的なアドバイスはありますか？

研究方法論と特徴

本研究のデータ収集は、マイケル・クイン・パットンの著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッド・セオリーのガイドラインに沿って実施された¹⁰。研究対象者の選択には、パットンの homogeneous sampling method を採用し、特定の共通項を持つ 11 名（前節で紹介）が選ばれた¹¹。インタビューは、本稿の執筆者に加え、自らも TCU に在籍する韓国人留学生である、金道均、姜昊憬、李成俊が担当し、さらにはこの 3 名が相互にインタビューを実施することにより、合計 11 名となった。

本研究のデータ分析にも、データ収集と同様、パットンによるグラウンデッド・セオリーのガイドラインが用いられている。データの分析は、まずさまざまなカテゴリー（まとめり、または概念）を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一旦バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業を要した¹²。質的研究は非常に限られた地域で、限られた人数を対象にして行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化することが出来る性質の研究ではない。さらに時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者を取りまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々である。質的研究の方法は、量的研究の範疇がなかなか及ばない、感情や信条といった事象へのアクセスを可能にするものであり、人間を対象にした宗教的研究に、比較的適する研究方法であると考えられている¹³。また質的研究の方法は、量的研究が取り組むことを躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもってそれらを詳細に記述することを通して、現象の本質を追い求めることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用する

10 Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks: Sage Publications, 2002).

11 Ibid., 235-36.

12 木下康仁『ライブ講義 M - GTA—実践的質的研究法』弘文堂、2007年、209-216頁

13 岡村直樹「教会における人間研究と現象学的アプローチ」（『福音主義神学』第 39 号、日本福音主義神学会、2008 年）141-142 頁

というスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものであろう¹⁴。

質的研究の最も大きな特徴であり、また頻繁に指摘される課題は、研究者の研究における位置付けに関することであろう。本研究のインタビュー者には3名の韓国人留学生加わっているが、質問の性質上、たとえば「差別」といったトピックに対して、より気兼ねなく本心を語ってもらうことを意識して選択されている。また同様にインタビューを行った本稿の執筆者は、現時点では教員という立場ではあるが、つい最近までは自身もTCUの韓国人留学生という立場を有していた。インタビューを用いた質的研究においては、データ収集、データ分析、提言の3つの場面が非常に重要となるが、今回の、韓国人学生に対して実施されたインタビュー調査が、同じ韓国人であり、さらにはTCUでの学びの経験をも共有する者によって実施された事実は、そこに働いたかもしれない遠慮、気後れ、さらには「忖度（他者の心情を推し量って相手に配慮すること）」といった反応を抑える効果があったのではないかと推察される。すなわち、より「本音」を語りやすい環境を作ることが意図されたのである。実際、数名の研究参加者からは、「話しやすかった」という感想が聞かれている。

データ分析の部分では、本稿の筆者に加え、質問作成に加わった、日本人教員である岡村直樹氏にも協力を仰ぎ、複数の視点からのデータ分析に対する配慮がなされた。また本稿は、研究のさらなる客観性を担保するために、収集されたデータの大きな部分を開示している。読む者を、研究分析のテーブルに招待するという意図がそこに込められている。

研究の倫理的配慮

「インタビューの内容は、個人名が特定できないよう注意して取り扱います。どうぞ安心して、思いのままをお語りください」。これは、インタビュー調査への参加依頼書に、添えられた一文である。「調査対象者に不利益が及ばない」ことは、人を対象とした研究の中で基本とされ、またそれは、必要な倫理的配慮でもある。本研究は、主に個人情報を取り扱うものではないが、個人名が特定されないように配慮して記述されており、本章で記述されている発言や回答の順番は、ランダムに設定されている。

14 萱間真美『質的研究実践ノート』医学書院、2007年、3、51頁。

3 研究の結果と分析

既述されているように、インタビューによって収集されたデータは、グラウンデッド・セオリーの方法論を用いて分析された。全16の質問から得られた回答の総量は膨大であり、残念ながら限られた誌面の中でそのすべてを公開することはできない。本章では、分析されたデータの中から、本稿の冒頭に記された本研究の目的に対して重要と思われるいくつかの項目を、カテゴリーに分けて列挙した。また、インタビュー時に語られた実際の言葉が、サポートデータとして付記されている。文章の読みやすさを考慮し、言葉は「ですます調」に統一されている。インタビューの内容は、対象者の同意を得たうえで録音され、後に文字起こしされた。インタビュー者が韓国人であったこともあり、インタビューの一部には、韓国語が用いられることもあった。その際は、インタビュー担当者が文字起こしと同時に、日本語への翻訳も担当した。

分析に関しては、カテゴリー化されたデータから浮かび上がってきたことに対する考察を中心に、留学生を対象にして教育学や心理学の観点から行われた既存の留学生研究の結果も参考にされている。また、本稿の2章にも既述されているが、回答内容の質的なクロスリファレンス分析の結果、インタビュー対象者の性別、年齢、在学年数、滞在年数といった個別の背景と、密接に結びついた明らかな規則性は浮かび上がって来なかった。したがってインタビュー対象者となった学生の個別の背景への言及はない。

①韓国人学生の多くは、TCUでの学びを比較的ポジティブに評価している。

調査対象となった学生からは、TCUでの学びに対して、多くのポジティブな回答が見られた。特に4つの建学の精神「福音主義」「超教派」「実践的神学教育」「世界宣教」それぞれに対するコメントが見られた。以下にそれらを列記する。

- ・TCUが福音主義で、超教派である点に魅力を感じました。
- ・TCUのオープンキャンパスに参加し、学校の4つの建学の精神「福音主義」「超教派」「実践的神学教育」「世界宣教」という理念がすごく気に入りました。
- ・私にとって、1番の魅力は、多様な教団教派の兄弟姉妹たちが全員寮生活をすることでした。

- ・やはり福音主義というものが一番の魅力だったと思います。
- ・TCUは超教派という点が優れていると思います。福音主義の幅がどのくらいなのかを確認する作業が私たちには必要で、TCUはその学びの機会を与えてくれていると思います。
- ・TCUが優れている点としては、まず超教派である点、また実習教会を毎年変更できて様々な牧会の現場を見ることができる点などが挙げられると思います。

建学の精神に関連する事柄に加え、日本語での神学教育、寮教育、さらには教員の人間性に関する言及もあった。以下にそれらを列記する。

- ・日本語で神学を学んでいますので、私がすでに持っている知識を切り替える作業なしで、最初から日本語で知識を習得できるので、新鮮というか、いいと思います。そして、日本語学校だと他の人たちと一緒に住むことはないのではないのでしょうか。そのような意味で、日本人と一緒に住みながら、日本語で生活できる環境は他にないと思います。
- ・TCUの強みは、ある意味で日々すぐ隣に同じクリスチャンがいるので、自然と周りの人々を通して学ぶことができることだと思います。
- ・寮生活などの共同体生活ができる点が優れていると思います。
- ・自分にとってすべての授業が興味深かったし、神学的に疑問に思ったことを学べたことが本当によかったです。また、これからの教会ミニストリーのためにもとても良い学びになっていると思います。
- ・毎日のチャペルで説教を聞くことができる点は大きいと思います。その積み重ねが将来説教をするにあたって役立つと思うからです。
- ・神学の学び、説教演習、早天祈祷や祈祷会などの祈りの時間、サークルや委員会活動、さらには教会実習といった「総合的」な学びと訓練が提供されていることは、将来の牧会生活に大いに活かされるはずだと期待しています。
- ・牧会の経験に基づいて教えられることや、忙しい中でも誠実に生徒の疑問に答えてくださる姿から教えられることが多いです。
- ・将来、周りの人へのあかし人となるため、良い訓練を受けていると思います。TCUの全ての教職員と学生がクリスチャンである点は優れていると思います。
- ・TCUでは、学びと霊的実践の双方が強調されている部分は良いと思います。学生同士の交わりも良いと思います。親しみやすい先生方の存在も素晴らしいと思

ます。

調査対象となった韓国人学生の多くは、なぜTCUでの学びをポジティブに評価しているのだろうか。当然、TCUが提供する学びの機会や、教育のための環境が高く評価されていると素直に受け取ることも重要であろう。しかし加えてそこには「日本で神学教育を受けることへの信頼感」や「TCUの学びの環境に対する心理的適応」があるように思われる。日本における留学生研究の見地からは、それらに関して、以下のようなことが語られている。

滞在期間が長期になるにつれて日本語能力は高くなり、またそれは積極的で強い留学動機づけとも関係している。すなわち、日本文化体験などの一時的で短期間(その多くは1年以内)で来日する(短期)留学生と比べると、「学位の取得」「技術の習得」などの明確な留学目的を持つ留学動機づけの高い留学生の滞在期間は、一般に長期にわたる。¹⁵

本研究の調査対象者の言葉の中に顕著に現れていたのは、学びの動機付けの強さである。インタビュー対象者の11人全員は将来、「献身者」として働くことを、天からの召しとしてとらえ、その目標に向かって進んでいると答えた。言い換えれば、彼らの「目的とする働き(ミッション)」に対する「深い関与(コミットメント)」の果たす役割が、彼らの大学に対する評価に大きな影響を及ぼしているであろうと推察されるということである。子供時代に来日した学生を除いても、日本での滞在期間は、約4年から8年と比較的長く、また一様に日本語の習熟度のレベルも非常に高く、上記の松下の研究と照らし合わせても、そこには整合性がみられる。

調査対象者の数名は、自身の日本語能力に関して、多くの教員から、留学生としてではなく、日本人学生と同じ様に扱われていると感じていると述べた。以下にその例を記載する。

・例えば、ACTS_{ES}生¹⁶に対しては、日本語能力をあまり要求しないと思います。

15 松下、前掲論文、142-147頁

16 英語で神学を学ぶ「アジア神学コース(The Asian Christian Theological Studies for English Speakers)」の略称。

それで、彼らに英語の授業が提供されていることは納得しますが、通常韓国人は当然のように全うするから、先生たちも韓国人学生はできるからと思ってあまり関心を持たないと思います。それが、ある時にはハードルが高くて大変です。

このような取り扱いに関しては、日本語能力の向上に結びついたとポジティブに捉える意見もあったが、もう少し配慮があってもよかったのではというコメントもあった。この点は、以下の②節につながっている。

② 韓国人学生の多くは、自身の信仰の成長や、そのために提供される機会に不十分さを感じている。

学業面、いわゆる「学びの質や機会」への評価と対照的なのが、彼ら自身の「信仰面」に関する評価である。TCUでの学びに関して高い評価を口にする多くの学生は、彼らの「信仰的成長」に関しては、その不足を口にした。将来、多様なミニストリーの現場に出て行くことを目指す「献身者」への教育機関であり、また彼らの「霊性」をも同時に取り扱うTCUにとっては、多少の危機感を抱かせる内容であると言えるかもしれない。以下にそれらを列記する。

- ・ 知的な満たしはありますが、霊的な満たし、またはモチベーションの面で難しい部分があると思いました。
- ・ TCUが良い学びを提供してくれているとは思いますが、私の信仰成長にどう関わったかはよくわかりません。
- ・ (TCUでの信仰の成長は) あまり感じていません。ただ、TCUにいる多くのクリスチアンの信仰の在り方や早天、祈祷会、チャペルの多くのメッセンジャーを通してはいろいろと学んできたとは思いますが。でも、それが果たして信仰の成長につながったと聞かれれば、自信を持ってそうとは言えないかと思っています。
- ・ 信仰的な面においては、入学する前より落ちているように感じます。むしろ入学してから信仰的な面においてないがしろになってしまった部分があると思います。ただ、それでも、なおこのTCUでの水曜祈祷会や早天などが自分を支えてくれると思います。もし、これらのこともなかったなら、信仰的にもっと弱まったかもしれません。
- ・ 家庭に起こった幾つかの出来事…を通して、自分の信仰が試される試練が与えら

れたことはありましたが、(しかし) 正直「TCU」だから信仰成長に繋がったとは言えないかもしれません。

・個人の信仰の訓練に関しては、環境的に守られている分、自分の努力が足りないと感じています。

調査対象者が「不足」と感じるその理由には、インタビューデータから大きく分けて2つの要因が浮かび上がってきた。一つは、構造的(プログラムの)な課題、もう一つは宗教文化的な課題である。

構造的(プログラムの)な課題とは、TCUによって提供されている学びの量と種類に関することである。複数の学生が、学び等の量に起因する忙しさを訴え、それによってもたらされる「信仰的な部分」に割くための時間の不足を語っている。また、TCUにおける学びの一部である「委員会活動」や「教会実習」に起因する忙しさに関する言及もあった。何人かの研究対象者からは、教師との距離感の遠さも構造的な課題として挙げられている。

・私はTCUの学びが忙しすぎて、むしろ靈性に関わるいろんなことがないがしろになってしまったと思います。靈性を保つ時間を確保できないというのは、言い訳かもしれませんが、あまりにも時間的に余裕がないので、朝、目が覚めると、聖書よりまずやるべき課題が目前にあるので、時間的になかなか厳しいです。

・濃い学び内容に対して、与えられている時間が少ないと感じています。少し余裕がある形でカリキュラムが改善されれば良いと感じています。また勉強以外のスケジュールが忙しすぎ、生活の中で時間に追われてしまう点が残念です。

・祈るときには一時的に平安がありますが、日々の忙しさの中で、もっと個人の時間、ゆったりできる時間が必要であると感じています。

・知的な面に偏っていて、信仰の先輩から学ぶ、つまり、神学教師と近い関係性の中で実存的に学ぶことはあまりできていない気がします。

・生活は忙しすぎると思います。先生の出す課題も多すぎると思います。学年が上がると、すべての学生に委員会活動等のプレッシャーが増し、勉強に集中できない点が改善されるべきだと思います。

・日曜日は奉仕があるので、月曜日は休みにすべきだと思います。勉強以外の忙しさが緩和されるべきだと思います。特に委員会活動は、緩和されるべきだと思います。

・スケジュールがキツすぎ、せつかくの良い学びを消化できずに、すぐに次の学び

になってしまいます。

・教育伝道師としての働きと、TCUでの忙しいスケジュールとの両立が非常に困難です。

学生の異文化経験と、宗教的人間形成を結びつける研究の数はとても少ない。そんな中、TCUの教員で、宗教教育学が専門の岡村直樹は、米国のミッション系大学の学生を対象にした研究の中で、そのことに言及している¹⁷。大学の日本人留学生の異文化的経験（主に人間を介した異文化経験）を質的に調査した結果、彼らの経験は、それまでなされてこなかったような深い内面時な自己吟味を促し、それが宗教心の覚醒や成長に結びついたことが明らかにされている。岡村は、研究対象となった大学での宗教クラスでの学びの量より、主体的な異文化の経験の量が、宗教心の覚醒や成長にはより重要であったとも語っている。韓国人学生のインタビューでは、学業に割かれる時間が多すぎることに、霊的な成長が起こっていないことが結び付けられて語られているが、岡村の観点から考察すれば、日本という異文化の中に身を置きながら、日本人や日本文化（日本人クリスチャンや日本の教会文化）に触れる時間が、学びに割かなければならない時間の確保を優先することによって、量的に制限されていることが、霊的成長の欠如に結びついていると分析することができるかもしれない。

「信仰的」また「霊的」成長の不足に関して、それが韓国教会の霊性の表現や、韓国の神学校との違いに起因するという意見も繰り返し口にされた。この課題を「宗教文化的課題」と呼ぶこともできるだろう。課題の全体を「文化的なもの」として矮小化することは避けたいが、米国の神学校との比較も考え、あえてそのように性格付けた¹⁸。またこの課題が「宗教文化的」であるとされても、対処は不必要であ

17 Naoki Okamura, "Intercultural Encounters as Religious Education: A Phenomenological Study on a Group of Japanese Students at a Christian University in California and their Religious Transformation," *Religious Education* 104, no. 3 (May-June 2009): 289-302.

18 本研究の分析に関わった岡村直樹氏によれば、自身の米国での神学校（福音的な牧師養成校）での体験の中では、学業面とは異なる、いわゆる信仰的、霊的なことを取り扱うプログラムは、TCUより少なく、それらはほぼ学生の主体性に委ねられていたそうである。つまりTCUは、

るということではない。当然必要を感じている学生が存在するのであれば、そこに改善の余地はある。

- ・韓国では重視される『靈性』に関する部分が扱われていないと感じました。もちろん、自分自身ももっと努力しなければならないところだとも思っています。
- ・靈性の面において、TCUは韓国の神学校ほど強調しないと思います。韓国の神学校の場合、先生たちは学びとともに個人の靈性についても触れてくれました。要するに、TCU全体では靈的な雰囲気をあまり感じませんでした。
- ・韓国で経験した長い祈りの時間とかがあると良いと思います。私個人の問題かもしれませんが。
- ・韓国は私を教会がケアしてくれて、私をサポートしてくれた人が多かったので、私が大変なときに周りの人たちや、メンターから助けられたり、一緒に祈ったり、あるプログラムに参加したり、集会だったり、早天だったり、回復され得る場が多かったと思います。

少数ではあったが、自身の信仰の成長や、そのために大学から提供される機会をポジティブに評価する意見も見られた。それらに共通するのは、「信仰」や「靈性」というよりは「社会性」「心理性」の成長と性格付けることも可能な意見であったことである。以下それらを列挙する。

- ・成長したと思います。学びや生活において、自分ができる範囲を少し超えるレベルが常に求められている環境によって成長させてもらったと思います。
- ・成長とは、いろいろな観点があると思いますが、私が言いたい「成長」とは、日本語の表現で、「幅」「範囲の広さ」における成長だったと思います。つまり、自分が許容できる範囲が広がったことを意味します。なぜなら、自分が韓国で経験した教団のスタイルがありますが、TCUではそれが違う人たちが聖書を解釈しており、このような生き方を実践できると思いました。私の中で、決めつけていたことが揺らぐ経験がありました。違う実践をしている人も私の兄弟として受け入れる、そのような成長ができたと思います。

韓国的ではなく、より米国的な神学校であると言えるかもしれない。

③ 韓国人学生の多くは、大学内の人間関係に関して、少なからずのストレスや困難さを感じている。

集団生活と、学びに関する時間的制約が多い大学生活において、全くストレスを感じない学生はいない。特に留学生の感じるストレスに関しては、一般論として以下のようなことが主張されている。「日本人学生の多くが経済的な支援をはじめ、有形・無形の援助資源をもっているのに対し、経済的・言語的・人的資源の少ない外国人留学生は、様々な困難を自力でクリアしながら勉学と取り組んでいる」¹⁹。

調査対象となった学生の多くからは、特に人間関係に関する言及があったが、その内容は多様であった。大別すると文化的背景の違いから派生するストレスと、心理的課題を持つ学生との関係性に起因するストレスに二分することができた。

・多くの韓国人学生は、人間関係、特に人との距離感に悩んでいるように個人的には思います。

・(日本人の) ルームメイトと 24 時間と共に過ごすのは大変です。誤解が生じたこともありました。忙しいクラスメイトに相談することも気が引けてできなかったこともあります。また一人の時間を作ることに課題を感じています。

・男子寮にいたときには、他の日本人とコミュニケーションをとること、自由に交わることができなかった雰囲気だったと感じたので、寮生活ははっきり言ってあんまり楽しくなかったですね。

・挨拶はしてほしいという要望があります。韓国人は挨拶を大切に考えているので、ぜひ日本人学生も積極的に挨拶してほしいです。

・韓国ではほとんど経験してないのですが、心が病んでいる兄弟たちが多くの中で、自分が何もしてあげられないという自分の無力さを覚えます。一緒にお祈りをしたり、食事をしたり、散歩もしたりしますが、状況は変わらないことに無力さを覚えると同時に、その原因がはっきり見えてこないことで悩んでいます。それを経験して、学べるようにはなっていますが、最初はどのように接すれば良いかわからなくて大変でした。

・精神的に課題のある学生との対人関係で苦労しています。

19 三代純平「留学生生活を支えるための日本語教育とその研究の課題—社会構成主義からの示唆」(『言語文化教育研究』8-[1], 2009年) 4頁

寮の男性学生に限定される言及ではあるが、「規律」や「思いやり」の欠如に起因するストレスに関する原因もそこに見られた。そこには「文化的」な側面と同時に、「宗教的」な側面も存在すると思われる。

・愛を持って、言い合える環境作りができればと思います。快適に住む環境になってないまま、学生同士も互いに無関心で、現実から目をそらしているように見えました。韓国人留学生はある程度経験を積んでTCUの独身寮に入ってくるので、特に男子寮の環境に戸惑いを覚えると思います。この問題をどのように解決ができるかも分からないため、学校側にこれに対する対策を求めるのも難しいと思います。

・(寮の) 規律を守るためには、ある程度のペナルティが必要だったり、(立場や年齢が上の者が) リーダーシップを発揮したりすることが求められるはずですが。韓国の軍隊に行っている韓国の男性だったら理解できると思います。しかし、男子寮の現状はそうではなく、ただキリストの愛を前面に出し、「優しい」雰囲気の中で、諸問題が発生しても祈りをもって解決する方向に行ってしまいます。いわゆる「クリスチャンならではの甘え」がそこにあるのではないのでしょうか。

さらには、TCUの居住環境に起因するストレスに関する言及もあった。建物(建築物の構造や間取り)と対人コミュニケーションの関連に関しては、2011年の東日本大震災後に、盛んに議論されるようになり、多様な意見が交わされている。頻繁に強調されるのは、プライバシーの尊重に加え、情報や感情の共有の場の必要性である²⁰。インタビューからの意見を以下に列記する。

・「自分の時間と空間」を確保できないのは、大きなストレスになると思います。いつも誰かと一緒にいる、誰かに見られている、そういった環境の中で日々の生活を送ると、例えば精神的に人よりも繊細な学生は、自分のうちに溜め込んだものを発散することができなくなってしまいます。それが続くと倒れてしまいます。寮は、強い者に育てる役割もあると思いますが、弱い者を守る目的もあると思うのです。それが共同体としてのあり方だからです。つまりバランスのとれた環境作りに注力

20 寺村淳・森田海・島谷幸宏「震災復興における地域コミュニティに寄り添う復興支援の在り方に関する研究」熊本地震における椿ヶ丘復・興支援ハウスの取組みを例にして」(『自然災害科学』vol. 36 特別号、2017年、25-40頁)

しなければならぬと思うわけです。

・男子寮での生活の中で、やっぱりプライベートが守れないことで困ったと思います。特に、自分一人でゆっくりと休める場所がないことが一番大きかったと思います。

・建物自体に問題があるのでは(笑)。人を疲れさせる構造だと思います。建物としてはよく建てられたと思いますが、寮生活の面に関する理解があまりなかったのかなと思います。集まる場所もなく、みんな玄関に溜まって話しています。空間が人に影響を与えることを覚えさせられる TCU 生活だったと思います。できれば、建物を新たにすると良いのではないかと思いました。

④ 韓国人学生の多くは、文化的理解を受けることを望んでいる。

日本語の習熟度や、強い目的意識が留学生の学びに与えるポジティブな影響に関しては上記した通りだが、言語文化研究者の三代は、日本語能力と文化への順応性に関し、そこには単純な相関関係以上の関係性があると主張する。

日本人との人間関係を築くために日本語は必要な要因であるとされる一方、日本語が上達し、日本での滞在も長くなるにつれて、異文化間の様々な摩擦も増え、人間関係に多くの問題を覚えるようになる留学生の姿が浮かび上がる。……来日して日が浅い、日本人との接触も限られている就学生の状況では日本語能力が高いことが友人関係の豊かさにつながる一方で、(長期) 留学生の場合は日本語能力と人間関係の間に相関関係が見られなかったことも、そのような留学生の姿と重なる。²¹

今回対象となった韓国人学生の中で、インタビュー中に「言語的課題」を挙げた者は少数(2名)であった。ほとんどの学生は日本滞在期間も長く、言語的コミュニケーション能力に関しては、大きな障害を感じていない。しかし、文化的な違いや、そこから発生する課題に関しては、以下のようなことが語られた。

・韓国人はみな剽窃行為に無頓着であるといったニュアンスのことをクラスで話さ

21 三代、前掲論文、4頁

れた時は、正直悲しかったです。

- ・韓国の信仰スタイルを理解してもらうのに時間がかかりました。誤解を受けることが多いと思います。人種というより、教会文化の違いであると思います。
- ・TCUが留学生を単に受け入れる器ではなく、彼らの背後にある教会を理解し、彼らとともに歩む器となって欲しいです。
- ・留学生を受け入れてはいるものの、その留学生を送り出している共同体や、国についてTCUがどれほど理解しているかを聞きたいのです。
- ・韓国からの留学生を受け入れていますが、彼らの韓国の教会をどれほど理解しているかを認識してくださると幸いです。私たちは同じ働きをしている同労者である認識を持って、留学生を受け入れ、理解して欲しいです。
- ・去年亡くなられた小林先生²²も韓国のある教会に訪問され、これからの協力関係などを話されたと思いますので、これからもこれが続けられたらいいと思います。
- ・TCUで、韓国人のアイデンティティーを持ち続けることは難しいと思います。韓国人の色を出しすぎると、もっと日本に合わせて欲しい、あなたは日本に来たのだからといわれてしまうこともあります。小さな違いも多くあることを理解してもらいたいと思います。またTCUでは、政治の話はタブー視されています。竹島を独島と言い換えると、その話しはここではしないと言われるてしまいます。韓国では教育の中で、民族的な部分が強調されますが、そのことをTCUで出すと、気が強いと思われたり、変な目で見られたりします。暗黙の強制があると感じます。

単に言語の習熟度が上達しただけで、留学生の異文化経験がポジティブなものになるというわけではないことが、本研究からも伺えた。上記されているように、文化的理解を欲するコメントが多く聞かれた。しかし中には、このような返答をした学生もあった。

- ・韓国人としての誇りを持つべきだと思いますが、その表現は気をつけ、控えるべきだと思います。

韓国人学生の多くは、TCUの中で彼らなりに非常に「気を遣って」生活しており、そのことはインタビューの端々から伺えた。そのような異文化に対する配慮を土台

22 小林高德・東京基督教大学前学長

にしつつ、重要なのは、そこにある文化的な違いを認識し、それを受容し、互いに歩み寄ることであるという主張が多く見られた。本研究の冒頭で、TCUの「理念とミッション」の中の「異文化・他者理解」という項目を紹介した。繰り返しになるが、そこには以下のようにある。「文化、国籍、性、年齢などの違いがもたらす『隔ての壁』を打ち壊すキリストの福音(神学)を 味わい、和解と一致を体験するために、外国語習得に力を注ぎ、多様な国際交流プログラムを実施して、異文化・他者理解を深める」²³。TCUには、「隔ての壁」の存在を感じる韓国大学生が多くいるという現実に目が向けられるべきであろう。

4 提言

本研究は、韓国大学生を対象に実施されたものであるが、そこで語られた内容には、韓国大学生以外の、より多くの学生のプラスとなり得る情報が多く含まれていた。以下に、インタビューデータの分析から導き出された提言を列挙する。提言の①は、韓国大学生に焦点を当てた提言だが、それ以降の②-⑤は、より広く他の学生の学びと信仰生活を改善する提言としてまとめられている。

① 韓国大学生に対する対応を充実させる。

今回のインタビューで最も際立っていたのは、多くの韓国大学生が、TCUでの学びの機会に感謝しつつも、学校生活において、学習面、生活面、そして信仰面に多様な不足を感じているということであった。それらを取り扱うには、対症療法的な対応ではなく、まずその文化や霊性を理解するところから始められるべきであろう。具体的には、勉強会の実施や、または韓国留学生による「チャレンジチャペル」のようなものを企画し、韓国クリスチャンの霊性や、文化、さらには歴史の認識(特に韓国と日本の間の)について学ぶ機会が提供されると良いかもしれない。言葉の壁を感じている留学生に対する韓国語での対応や、初年度教育のようなプログラムが作られ、大学での学びへの適応とスムーズな移行を念頭に置いた、日本語や日本文化の学びがあればさらに良いであろう。また多くの韓国大学生は、日本の教会との接点が少ないため、実習教会の紹介も必要である。韓国のキリスト教を学ぶことは、日本のクリスチャンにとっても有益であることも考慮し、韓国語の書籍

23 東京基督教大学ウェブサイト (<http://www.tci.ac.jp/info/statement>)

の図書館での取り扱いを増やすことや、韓国人神学者との交流に積極的に取り組むことへの検討も合わせて提言したい。

② 留学生の靈性に配慮し、超多忙なスケジュールを緩和する。

「私は TCU の学びが忙しすぎて、むしろ靈性に関わるいろんなことがないがしろになってしまったと思います。靈性を保つ時間を確保できないというのは、言い訳かもしれませんが、あまりにも時間的に余裕がないので、朝、目が覚めると、聖書よりまずやるべき課題が目前にあるので、時間的になかなか厳しいです」。このコメントは、留学生のみならず、多くの日本人学生からも同意を得られるものであろう。昨今社会では「ワーク・ライフ・バランス」という言葉が用いられているが、TCUにあるのは「スタディー・スピリチュアリティ・バランス」の課題であるかもしれない。学生の本分が学びであることは言うまでもないが、良い学び、特に良い神学の学びは、靈的な充実と適度な休息によってもたらされることは明らかである。そのバランスを考慮し、学生の声を聞きつつ、大学全体のカリキュラムが改定されることを提言したい。休息という観点からは、月曜日を基本的に休みとすることも重要であろう。多くの学生は、日曜日の教会実習で大きな役割や責任を担っている。彼らにとって日曜日は、魂の安息日ではあったとしても、肉体の安息日とはなっていないのである。

③ 多様な「靈性」への取り組みに対してオープンな態度を持つ。

「超教派」という大看板を掲げる TCU が、福音派に属し、TCU に学生を送る様々な教会・教団・教派の、信仰の表現等を含む神学的、および宗教文化的側面に対して、よりオープンな態度を持つことは重要であろう。前章の④にも言及されているが、韓国人学生の信仰の表現には、文化的な影響が色濃く反映されている。ある信仰の表現に対して、それを神学的考察のみから判断することは不十分であり、危険でもある。例えば手を上げて祈る、大声で祈るといった表現を、それをペンテコステ神学の影響と短絡的に結びつけることなどである。それは、ペンテコステ神学に対する神学的考察以前に、宗教文化に対する認識の不十分さを物語っている。神学的、および宗教文化的配慮に基づき、より多様な信仰の表現を、チャペルなどで積極的に用いることは、学生のキリスト教理解や他者理解をより豊かなものにすると考えべきであろう。

④ 学生同士、そして学生と教職員との交わりの機会を拡充させる。

学生同士の交わりの機会を提供することは、今後の重要課題の一つであろう。同じ寮で生活していても、そこには交わりの機会の欠如があることが、インタビューを通して明らかになった。寮の運営は、学生主体で行われているが、学校との協議を重ねつつ、学生同士の横の交わりが拡充されるべきであろう。

またインタビュー全体を通して、学校と学生の間にあるコミュニケーションの欠如（またはコミュニケーションの一方方向性）の課題があると感じられた。そこにあるのは、学生の現状を知らない大学、そして大学に対してあまりものを言わない学生の姿である。この欠如がもたらしているのは、大学側から学生に対する丸投げか、あるいは学校による決定事項の枠組みに、学生が合わせるという現状であると言えるかもしれない。コミュニケーションとは本質的に双方向性のもので、それはいわばキャッチボールのようなものである。しかし現状は、一方通行型の投げっぱなしのボールのように、学生はひたすら学校側から提供される情報や交わりの機会に対して、非常に受け身になっているという印象を受ける。クリスチャン共同体において「豊かな交わり」は、最重要課題のひとつである。ただ、その交わりに対するものの考え方や方法論には多様性があり、世代や性別によるギャップも存在する。そのギャップを効果的に埋めていくことによってクリスチャン共同体には成長がもたらされる。必要なのは、学校（教員）の視点から、学生の視点への意識転換ではないだろうか。それは学生の主体性が発揮され「発信する側」になるということでもある。具体的には、月一回程度の学生と教職員との懇談の時間を開くこと等を提言したい。ただ、単に懇談会のための懇談会にならないように、そこで出てきた内容や意見を公（ウェブサイトなど）に記す必要があるだろう。その内容を開示し、明確化することによって、学校側のモチベーション（実行力）が上がることを期待され、また学生の意見が反映されることによって、より積極性をもった学生の参加が期待される。当然その中で、留学生のコミュニケーションのニーズに応えるため、留学生の声に耳を傾ける学校側からの工夫も必要であろう。急激に進むグローバル化時代に、現世代のニーズを当事者から聞くことの視点がいかに大切であるのかを意識しつつ、大学と学生間のコミュニケーションの再構築が今後求められる。

⑤ 寮の規律と施設を改善する

提言の④にあった、学生同士の交わりの機会の拡充を前提としつつ、まず寮の規律の改善を提言したい。たとえそこがクリスチャンの集まりであっても、社会生活

に必要なルールと、その執行の確認は重要であり、それは寮生活のクオリティー、さらには学びの質を高める上でも必要と思われる。運営とは別に、皆から尊敬を集める学生がリーダーとして立てられ、学生自らが決めたルールが、きちんと守られているかを確認し、それが出来ていない場合に、励ましと訓戒を与える人的システムの構築である。例えば、寮モニターや、RA（リサーチ・アシスタント）の存在である。

また、経済的な課題があることは十分承知のうえで、寮の物的生活環境の改善も必要であろうと思われる。学びとの戦いを妨げる「カビ」との戦いは、その一例である。寮で生活する者の声が十分に反映された改善が今後望まれる。

5 最後に…

最後に、この研究で用いた質的研究の方法、すなわちグラウンデッド・セオリーの方法論そのものに関する言及を持って、この研究を閉じたい。

本研究を通して本稿の執筆者は、多くの韓国人学生から直接話しを聞くことができた。研究者自身も TCU の韓国人留学生であったことは、インタビュー対象者にも知られており、多少答えにくい質問に対しても、比較的正直な回答を得ることができたのではないかと感じている。学生の話しの中には、自らの過去の経験や思いと重なる部分もあったが、そうではない内容も多く見出された。同じ学校で時を過ごした韓国人同士でありながら、そこには経験の多様性や、相違があることに改めて気付かされた。同時に、在学期間の比較的長い学生の数名から、これまで、このような本格的な聞き取り調査が TCU の中で最も数の多い韓国人学生を対象になされてこなかったことと、今回、インタビューに参加し、意見を求められた（「話しを聞いてもらえた」「傾聴された」）ことへの嬉しさや謝意が研究者に伝えられた。

研究におけるデータ収集を中心に据えるグラウンデッド・セオリーについて、聞く（傾聴する）という行為の観点から、TCU 教員の岡村は、2012年7月のクリスチャン新聞の中で、以下のように語っている。

グラウンデッド・セオリーという言葉をご存じだろうか。看護学、福祉学、心理学、教育学等の分野で近年多用されている研究方法で、特にケアや教育の現場において、その結果には優れた有用性があると考えられている。アンケート調査に代表される広く浅い、いわゆる「量的」な研究方法とは異なり、それ

は長時間のインタビューや長期の観察等を用いつつ、より狭くより深いデータの「質的」側面に注目する方法である。グラウンデッドという名前が示す通り、現場の様々な声をデータとして収集し、そこから導き出される結論に基づいた問題の解決方法を模索するこのアプローチは、研究者に、時間と労力をつぎ込みつつ徹底的に現場にこだわることに、研究対象者をより小さなくくりで、より深く知るための弛まぬ努力を常に求める。²⁴

クリスチャン新聞の、「オピニオン（論説）」の中で岡村は、教会における牧会と、研究の方法論を重ねて考察している。そこで主張されているのは、人の話しに耳を傾けることの重要性である。岡村はこう続ける。

牧会者が、霊の飢え乾き、人間関係の苦しみ、教会生活の悩みなどの様々な課題を持つ人々を正しく導くには、まず彼らひとりひとりの現在位置と必要を的確に把握することが求められる。そしてそのためには、牧会の現場で、近隣住民や求道者、信徒、そして教会スタッフらと真摯に向き合い、時間と労力をつぎ込んで彼らの声を傾聴しつつ、彼らの必要を理解し、それを問題解決や課題克服に活かすというグラウンデッド・セオリーと同様なアプローチ、又は少なくとも同様な「態度」が必要不可欠なのだ。²⁵

本研究のインタビュー調査の過程で、研究者の印象に最も強く残ったのは、研究者の共感的態度（傾き等）に対して喜びを伝える表情（微笑み等）や、研究者に自らの苦しさを何とか伝えようと奮闘する真剣な眼差しであった。そして改めて思われたのは、傾聴し、共感しつつ、相手の必要に寄り添うことの重要性である。もちろんキリスト教の信仰者には、祈りを通して天の父なる神に自らの必要を訴える特権が与えられている。しかしこの世においては、聴くという役割が信仰者、特に教職者にも与えられている。本研究は、神の言葉を共に学ぶ神学部在籍生、学生の霊性に関与することをもその務めとする教員が、個々の学生の思いに時間を割いて耳を傾け、共感し、大学という学び舎を、さらに彼らの成長にふさわしい場所と

24 岡村直樹、「時間と労力をかけ、人と向き合う働き」（クリスチャン新聞「オピニオン」2012年7月8日）

25 同前

する作業に真剣に取り組むことの重要性を改めて感じる経験であった。今後、学生の言葉に耳を傾ける研究や調査が、より良い教育環境の整備や、学生の霊的成長のために積み重ねられていくことを祈りたい。